「よりそう人」

作・ごまのはえ

登場人物

みちよ……山の中腹の集落に住む家族の長女。戦争で身寄りをなくした子供達の面倒をみる「寮」で働いている。後に川谷と結ばれる。昭和七年生まれ。

すみ……みちよの妹。後に信介と結ばれる。昭和十六年生まれ。

あきえ……みちよらの従妹。満州からの引き揚げ者。昭和十年生まれ。

川谷……舞鶴市内の中学校教師。病身の妻と息子がいながらもみちよに惹かれる。

俊章……川谷の息子。後に東京オリンピックの聖火ランナーに選ばれる。

信介……海のそばにある映画館「浮島映画館」の二代目。

浩介……信介とすみの息子。勉強が苦手。

劇中劇／面会シーン登場人物

母……あきえの母。満州から故郷舞鶴に引き揚げる。

少女……あきえの少女時代。

たま……あきえの妹。昭和十六年生まれ。引き揚げの途中、置き去りにされる。

通訳……あきえと「あの人」の会話を通訳する。面会室にのみ登場。

第一幕　山の家

一幕一場　昭和二十七年十二月

日本海の港町舞鶴。
明治以降、この町は国の求めに応じて様々に姿を変えてきた。
そこで暮らす人々の様子を、「山」と「海」の二幕にわけて描く。

山の中腹にある集落に、幾つかの民家が寄りそうようにたっている。
そのなかの一軒が一幕の舞台。
茅葺きの母屋。庭に大きな栗の木。
玄関のそばでは犬が首を伸ばして待ち構えている。

舞台は居間。真ん中に掘りごたつ。棚に雉と狸の剥製と、煙草の空き箱でつくられた軍艦。壁には召集された家族の写真。柱には同じく煙草の空き箱で織られた千羽鶴がぶら下がっている。
上手にガラス戸がある。先には玄関に通じる廊下がある。
下手奥は台所や別の部屋に通じる。戸は常に開いたままで暖簾がかかっている。
台所と玄関は、居間を通らずに移動することができる。
舞台と客席の境には窓がある設定。
十二月。
コタツの上にはこの家の長女みちよと、次女すみがいる。
二人はみちよが勤める「寮」で催されるクリスマス会の準備をしている。
みちよは裁縫をしている。
すみは、納得いかない様子で紙（サンタクロースの絵が描かれている）を睨みつけている。

みちよ　すみちゃん。
すみ　ん？
みちよ　（眉間を指さし）ここ、シワよっとるで。
すみ　だって、
みちよ　そういう顔になってしまうで、
すみ　赤いズボン、赤い羽織、赤い帽子に白いひげ。還暦のじぃさんみたい。
みちよ　（笑う）
すみ　川谷先生って、ほんまにサンタクロース知っとってん？
みちよ　知っとるで。すみちゃんこそ、サンタクロース知らんやろ？

すみ　うん。
みちよ　それやのに先生の絵を疑うんはおかしいわ、
すみ　でも、
みちよ　ええから手伝って、ズボンだけで手いっぱいや。
すみ　でも、寮の子のなかには、ほんまのサンタクロース知っとる子もおる思う。満州からの子もいっぱいおるやろ？　だって、あきえちゃんあっちおった頃、クリスマス会したことあるって言うとったし。
みちよ　あーーー、
すみ　寮の子に「こんなんサンタクロースちゃうわ」言われたらどうするん？

みちよは笑う。

すみ　なんで笑うん。
みちよ　これ川谷先生が着るんやって、
すみ　ほんで？
みちよ　どうなるやろ（と笑う）。

すみはコタツから立ち上がる。

みちよ　（すみに）お茶、それとお蜜柑。
すみ　あきえちゃん、また映画かなぁ。
みちよ　ええやん。自分のお金やし。
すみ　おんなじ映画何回も観て楽しいんやろか。
みちよ　好きなんやろ。
すみ　知っとった？　あきえちゃん、映画だけが目的ちゃうんやで、
みちよ　もうええからお茶とお蜜柑とってきて、
すみ　あきえちゃん、映画館の息子さんといっつもお喋りしとる。
みちよ　へー、
すみ　ロビーでずっとお喋りしとんやって、
みちよ　手伝うか、お茶いれるかして。
すみ　上映しとる最中もロビーで喋っとんやで、クリームソーダ食べて。何しに行っとんなん。
みちよ　学校でそんな喋り方したらあかんで。
すみ　でも学校でも噂やもん、あれあんたとこの従妹ちゃうかって。
みちよ　あんた何しに立ったん？
すみ　……。

すみはコタツにもぐる。
みちよは立ち上がる。

すみ　（みちよに）お茶、それと蜜柑とかりんとう。

みちよは暖簾をくぐり（下手奥側）台所に向かう。
すみはコタツの上に散らかる紙の束から一枚を取り出し、

すみ　（紙を読む）クリスマス会のお知らせ。讃美歌合唱、サンタクロース登場、プレゼント配布、

台所からみちよの声。

みちよ（声のみ）　雪―――、
すみ　は？
みちよ（声のみ）　雪―――、初雪や、

すみは立ち上がり外を見る。
細かな雪が風に舞っている。
みちよがお茶と蜜柑とかりんとうを持って戻ってくる。
散らかった紙束をかき分け、コタツの上にそれらを置く。
そして立っているすみに向かって蜜柑を投げる。

すみ　あの頃が一番楽しかった。
みちよ　あの頃って？
すみ　おばさんが元気やった頃、
みちよ　あんたが知らんだけや、あの頃が一番大変やったんやで、
すみ　……ほんな教えてん。
みちよ　また今度。
すみ　いっつもそれ。私には何（なん）にも教えてくれん。わたしおばさんにすごい可愛がられたんやさかい
みちよ　何（なん）にも隠しとらんで。
すみ　嫌やなぁ。
みちよ　何が？
すみ　お兄ちゃんにお嫁さんが来てしまうし。あきえちゃんは美容師の学校行くかも言

うとるし。
みちよ　私がおるやん。
すみ　……やっぱり知らんのや。
みちよ　は？
すみ　わたし、聞いた。
みちよ　……、
すみ　あ、言うたらアカンかった、
みちよ　こら。
すみ　お父ちゃん。たのんどったで。桑原のオジサンに。もう二十歳やし、ええ人紹介してくれって。
みちよ　……。
すみ　あ、そうか。あきえちゃん、なんか持っとるかも。
みちよ　は？
すみ　サンタクロース。写真とか。
みちよ　あかんで。
すみ　（下手奥に向かう）
みちよ　やめなさい！
すみ　大丈夫。帰って来るん夜やで。
みちよ　そやけど、勝手に触ったらあかんの。
すみ　どこやろ（と、暖簾をくぐりあきえの部屋に向かう）。
みちよ　こら！

みちよはすみを追う。居間には誰もいなくなる。
やがて玄関先で飼い犬の「ペス」が吠える。
客人（川谷）が来たようだ。

川谷（声のみ）　ごめんくださーい。白糸中学の川谷と申します。ごめんくださーい。

すみは、居間を通らずに玄関に向かう。

川谷（声のみ）　あ、
すみ（声のみ）　あ、
川谷（声のみ）　川谷です。白糸中学の、
すみ（声のみ）　はい。（屋内にいる姉に）おねーちゃん。川谷先生！
川谷（声のみ）　もしかしてあきえさん？
すみ（声のみ）　いえ、妹です。

川谷（声のみ）　あ、そうか。君がすみちゃんか。ごめんね急に。あの親御さんは？

暖簾からみちよが居間に来る。
棚にあった手鏡で髪を整え、ガラス戸を開けて玄関に向かう。

すみ（声のみ）　今日はいません。
川谷（声のみ）　あ、そうなんだ。
すみ（声のみ）　今日は結納なんです。
川谷（声のみ）　え？

みちよが玄関に来たようだ。
入れ替わるようにすみはあきえの部屋へ。

みちよ（声のみ）　どうも、
川谷（声のみ）　あ、どうも。ごめんなさい急に、
みちよ（声のみ）　いえ、どうかしたんですか？
川谷（声のみ）　いや、あの、

ペスがまた川谷に吠える。

みちよ（声のみ）　ペス！！

みちよがペスを叱る間に、すみは居間に戻って来る。
古い箱を持っている。箱から沢山の写真をとりだし、コタツに並べる。
その間もみちよと川谷は玄関で喋りつづける。

川谷（声のみ）　立派な栗の木ですね。
みちよ（声のみ）　ええ。
川谷（声のみ）　想像してた以上です。すぐわかりましたよ。
みちよ（声のみ）　ええ、
川谷（声のみ）　結納って、
みちよ（声のみ）　あ、兄がもうじき結婚するんです。それで今日は父も母も向うの家に、
川谷（声のみ）　そうか。…。じゃ（と帰ろうとする）、
みちよ（声のみ）　あ、でも、
川谷（声のみ）　いや、そんな、
みちよ（声のみ）　あ、出来たんです。ズボンだけですけど、

川谷（声のみ）　サンタクロース？
みちよ（声のみ）　はい。
川谷（声のみ）　じゃ、…寸法もはからないといけないし、
みちよ（声のみ）　はい。
川谷（声のみ）　じゃ、寸法だけ、
みちよ（声のみ）　どうぞ。

川谷とみちよはガラス戸から居間にやってくる。
みちよはすみが勝手にあきえの写真を持ち出したことに顔をしかめるが、

みちよ　（座布団をあてがい）どうぞ、
川谷　どうも、
みちよ　お茶、ちょっと待ってください。
川谷　あ、おかまいなく。

みちよは台所に向かう。

川谷　結納か、えらい時に来ちゃったな。
すみ　あきえちゃんのこと知っとんですか？
川谷　うん。みちよさんからお二人のことは、
すみ　あきえちゃん、映画観に行きました。
川谷　はは。そうか。
すみ　（何かに気づいたように）あ、
川谷　僕はね、映画は実に良い勉強だと思ってます。民主主義がどんなものか、学校じゃいまいち伝えられない。でも映画を見ればよくわかる。
すみ　（安心したように）「風と共に去りぬ」。
川谷　うん。あれはいい映画だね。でもここから一番近い映画館って、
すみ　浮島。
川谷　そりゃ大変だ。
すみ　だから朝すごく早起きして行きました。
川谷　へー。好きなんだね。
すみ　……（黙って川谷を見る）。
川谷　なに？
すみ　（慌てて首を横にふる）

台所から湯呑を持ってみちよがやってくる。

川谷　あ、どうも、
みちよ　いいえ。すみちゃん写真かたずけて、
すみ　だって、
みちよ　そこズボン広げるさかい、
川谷　（写真を見て）これは…東京？
みちよ　満州です。従妹が住んでたものですから、
すみ　あきえちゃんの子供の頃の写真。ここにサンタクロース写っとるかもしれません。
川谷　へー、そりゃ助かるな。
すみ　（写真を見て）お姉ちゃん見て、パン焼いとる。
みちよ　ほんまやね、
すみ　（写真を見て）機関車。
みちよ　へー。
すみ　あ、これおばさんや。懐かしー。
みちよ　そうやな。
すみ　やっぱりあきえちゃんに似とってや。
川谷　（写真を見て）ん、この帽子。ユダヤのお坊さんかな。
すみ　あきえちゃんのお父さんは？
みちよ　写っとらんよ、
すみ　なんで？
みちよ　だってこの写真おっちゃんが撮っとるもん。
すみ　あ、そうか。
川谷　（ある写真の少女に気が付き）あれ？　この女の子…、ちょっと似てません？　すみちゃんに、
すみ　（写真をのぞき）ほんまや。
みちよ　……。
すみ　お姉ちゃん、この人だれ？
みちよ　……。妹さん。
すみ　え？
みちよ　あきえちゃんの妹。
すみ　妹？　あきえちゃん妹おったん？
みちよ　うん。
すみ　やっぱり。私には内緒ばっかり。

みちよは黙り込む。
川谷は何らかの事情を察して話題を変える。

川谷　あ、お兄さんの結婚式っていつ頃なんですか？
みちよ　来年の三月頃や思います。なんせ雪が、
川谷　でしょうね。この山道じゃ、
すみ　この子（あきえの妹）、いまどこにおるん？
みちよ　……。
川谷　しかし大変でしょうね。三月じゃまだ雪も残ってるし。
すみ　教えてん。
みちよ　また今度、教えたげるさかい、

玄関から嬉しそうなペスの声。
しばらくしてあきえの声。

あきえ（声のみ）　ただいまー。
みちよ　すみちゃん写真（と写真を片付け始める）
すみ　ええやん写真ぐらい、
みちよ　人のもん勝手に見たらあかんやろ、
すみ　もう間に合わんよ。
みちよ　早よ！
あきえ　（廊下を歩きながら）雪、初雪やわー。（居間にやってくる）

机には写真がいくつか散らばったまま。

川谷　お邪魔してます。白糸中学の川谷です。
あきえ　あ、
川谷　みちよさんからお名前は聞いています。私、たまにですけどみちよさんがお勤めの寮のお手伝いをしてまして、今日は今度のクリスマス会で、ちょっと。
あきえ　あぁ、
みちよ　ごめんあきえちゃん、これ勝手に見せてもうとる。
あきえ　あ、うん。
川谷　誰もサンタクロース見たことなくて、参考になればと思いまして、すみません。
あきえ　いえ、
すみ　あきえちゃんクリスマス会の写真ないん？
あきえ　そこ、ない？
すみ　ない。
あきえ　ふーん。（と言いながら台所の方に去り、そこから自室へ）

すみ　ほら、全然、怒っとらへん。（台所に向かって）映画観とったん？
あきえ（声のみ）　行ったよー、
すみ　（小声で）なんか隠しとる。
みちよ　こら、
すみ　だって帰って来るん早すぎるやん。
みちよ　すみちゃん。
すみ　学校で変な噂されるん私なんやで、
みちよ　アンタが変な噂しとんちゃうん。

すみは不機嫌な様子で立ち上がる。

みちよ　どうしたん？
すみ　ペスの散歩。
みちよ　かたずけてからにしなさい。
すみ　わたし、嫌やなぁ、
みちよ　何が？
すみ　この家。もう私のおるとこないわ。

すみはガラス戸から廊下へ、そして玄関に。

みちよ　こら、
すみ（声のみ）　ペス。いこ。

玄関からペスのはしゃぐ声。そのまま散歩に行ってしまう。

川谷　どうしたんだろう。
みちよ　……、
川谷　あ、全然、詮索する気はないんで、ごめんなさい。

みちよは、残った写真を箱に片付ける。
出来たばかりのズボンをとる。真っ赤なズボン。

川谷　うわーー。
みちよ　（笑う）
川谷　え？
みちよ　すみちゃんが還暦みたいって、

川谷　はは。確かに。

川谷はズボンをはく。

みちよ　今日、来てくださって助かりました。当日やったらこんな時間ないかもしれん。

川谷　いや、こんな日に来ちゃって、

しばし二人は無言。

みちよはずぼんの裾を合わせる。

川谷　昨日、妻が入院しました。

みちよの手が止まる。

川谷　前もお世話になった亀岡の病院です。秋くらいから嫌な兆候はあって、一週間前、病院に連れて行ったら、やっぱり肺に影があって。結核でした。

みちよ　はよ奥さんのとこ行ってあげてください。

川谷　妻の郷が病院に近いんですよ。妻も私に世話されるよりそっちの方が気楽みたいで、

みちよ　そんな、

川谷　俊章は近所の友達と遊びに行ってしまいました。家で一人ぼんやりしてたら、みちよさんの話を思い出したんです。山の上の村。大きな栗の木。ほんと、話に聞いたとおりですね。素敵なところです。

みちよ　帰ってください。

暖簾から小箱を抱いてあきえが現れる。

あきえ　あれ、すみちゃんは？

川谷　あ、犬の散歩みたい。

あきえ　これ（小箱）、

みちよ　…。

あきえ　みっちゃん？

みちよ　え？

あきえ　これ（小箱）満州の写真、

みちよ　まだあったん？

あきえ　うん。数はそんなないけど、そっちないんやったら、こっちや思う。

みちよ　よいん？
あきえ　……うん。
川谷　どうも、お手数かけます。

川谷はズボンを脱ぐ。裾にはまだ待ち針が刺さったまま。
あきえは小箱から写真をとりだす。
小箱には沢山の写真と、カメラが入っていた。

川谷　（写真を手に取り）うわー、大きな建物ですね。

あきえは写真から離れ、以下の会話でも写真を見ようとしない。
みちよはそんなあきえを心配そうに見ている。

あきえ　赤レンガですか？
川谷　あ、はい。
あきえ　それ、新京の駅です。
川谷　へー。（別の写真を手に取り）ＹＡ、ＭＡ、ＴＯ、
あきえ　ヤマトホテル。
川谷　あ、聞いたことあるな。
あきえ　ウチは散髪屋やったんです。小っちゃいお店やったんですけど。たまにホテルまで出張に行ってました。
川谷　へー。（クリスマス会らしき写真を見つけ）ん。これ、何かのお祝いかな。
あきえ　どんな格好してます？
川谷　赤と、白の、髭のオジサンと子供らがいっぱい。
あきえ　それ、クリスマス。髭のおじぃさんがサンタクロース。
川谷　こーゆう髭か、（紙を見て）だいぶ違うな。
あきえ　メリークリスマス、って、言ってた気がする。
みちよ　え？
あきえ　メリークリスマス。
みちよ　どういう意味？
あきえ　わからん。でも、吉野町っていう町があって、そこで友達ン家（チ）がパン屋やっとってん。お父さんがロシア人でお母さんが日本人。それでクリスマスパーティに誘われて、妹が行きたい言うから、お父さんも一緒に来ることんなって。

あきえの口調は次第に早く激しくなる。

あきえ　ウチもなんかご馳走持っていかな思て、そしたらお母さんが仰山おはぎこしらえてくれて。でも友達パン屋やん。ケーキとかクッキーとかいっぱい並んどって、飲み物もサイダーとかミルクやし、おはぎ出すんすごい恥ずかしかった。そしたら妹が、

みちよ　（話を遮るように）あきえちゃん。

あきえ　……。大丈夫。

川谷　（カメラを指さし）それ、お父様のですか？

あきえ　あ、はい。でも、壊れてしまって、

川谷　ちょっと見ていいかな。

あきえ　あ、どうぞ。

川谷はカメラを手に取り詳細にみる。
あきえとみちよは窓の外を見る。

みちよ　ごめんね。

あきえ　うん。

みちよ　……。

川谷　これなら直せますよ。

あきえ　ほんまですか？

川谷　ここの部品が壊れてるんですが、問い合わせれば送ってくれずはずです。

あきえ　ありがとうございます。

川谷　ちょっと預かっていいですか、クリスマス会には間に合わないと思うけど、お兄さんの結婚式には、

あきえ　はい。

川谷　じゃ、僕はこれで、

舞台ゆっくり溶暗してゆく。
川谷が居間を去る。みちよは見送りに立たない。
しかたなくあきえが見送りに立つ。玄関に去る。
居間にみちよを残し、舞台暗くなる。

一幕二場　昭和二十八年九月

みちよは変わらず「寮」で働いている。
あきえは美容師の専門学校通うために下宿生活を送っているが、夏休みのため帰

省している。

時刻は午後四時。数日前から激しい雨が降り続いている。
空は厚い雨雲に覆われて居間も薄暗い。ちゃぶ台の上にはお茶とかりんとうが散らばっている。部屋の電灯はついたまま。さっきまで人がいた気配があちこちにするが、誰もいない。雨音と風が木々を揺らす音だけが響いている。

玄関からあきえの声。
雨合羽に泥のついた長靴のまま廊下から居間に入ってくる。

あきえ　すみちゃーーん。返事してーー。みんなア神社におるで。すみちゃーん。ご飯もお布団もあるさかい、なんにも持っていかんでええでー、

台所の方からすみの唸るような声。あきえは慌てて台所に向かう。
やがてすみを抱えて居間に戻ってくる。

あきえ　すみちゃん、（と体をゆする）
すみ　イタイ、
あきえ　どうしたん？
すみ　足、…、なんか落ちてきた。
あきえ　（足を触り）ここ？
すみ　痛い！！
あきえ　（患部を見て）大丈夫。血はでとらんから。

山々に「どーーーん」と轟音が響く。その後、木々や岩が押し流される音。
居間の電灯が消える。

すみ　何？
あきえ　どっかの山が崩れたんや、
すみ　……、
あきえ　さっきオジサンが言うとちゃった。最近ずっと雨やろ。流された木（きぃ）やら岩やらが、山の斜面のあちこちに集まっとんやって。そこにどんどん水が溜まって、しまいには山肌ごと崩れるんやって。
すみ　…ペスが…ペスがおらん、
あきえ　今頃みんなァと一緒に神社おるって、
すみ　ほんま？

あきえ　うん。

あきえはすみを背負う姿勢、しかしすみは動こうとしない。

すみ　どっかで生き埋めになっとったらどうしよ。
あきえ　大丈夫やって。
すみ　探さな（と立ち上がろうとする）
あきえ　すみちゃん！
すみ　ペス見つけたらすぐいくし。
あきえ　あかんって、

あきえは立ち上がろうとするすみに、手を貸そうとするが、すみはそれを振り払う。
すみは自力で立ち、歩く。そしてペスを探しにゆく様子。

あきえ　あかんで、
すみ　ほっといて。
あきえ　お願い、神社行こ、
すみ　ペスも家族なん！
あきえ　……。すみちゃん神社まで歩ける？
すみ　え？
あきえ　ペスは私が探す。すみちゃんは先に神社行っとって。
すみ　ちょっと、

この時、玄関から物音。何かが侵入してくる気配。

すみ　ペス？
あきえ　待っとって。

あきえは廊下に出る。そのまま玄関に。
しかし玄関で「とんでもないもの」と出会う。そして「とんでもないもの」と向かい合ったまま、廊下から居間に押されるように戻ってくる。
「とんでもないもの」とは牛だ。
ご近所の農作用の牛が飼い主を離れ、さまよい歩いているのだ。
あきえもすみもは牛に見つめられ動けない。
牛は二人の臭いを嗅ぎ、その後、ちゃぶ台にあったかりんとうを食べる。

すみ　（今のうちに）行こ。
あきえ　うん。

二人が居間を出ようとすると、すみのズボンの裾を牛が咥える。
まるで「ここに居ろ」と言わんばかりに二人を引き留める。
その時、山々に轟音が響く。音はさっきより近い。
恐怖でしゃがみ込んだ二人の頬を、牛は慰めるように舐める。
玄関からみちよの声。

みちよ　（声のみ）すみ！。あきえちゃーーん。おらんの？　おったら返事して！！

雨合羽に長靴姿でみちよが廊下から居間へ。
居間の様子をみて、絶句する。

みちよ　……何しとん？
すみ　お姉ちゃん（と、みちえに抱きかかる）
みちよ　アンタ足怪我しとるん？
すみ　…だってペスが。
みちよ　ペスはもう神社おる。私らぁもはよ行こ。
すみ　うん。
みちよ　（すみの脇を抱え上げ）あきえちゃん、そっち持ったって、
あきえ　お母さん。
みちよ　……？
あきえ　ここに居よ。
みちよ　何言（ゆう）とん？　だんだん近づいとるんや。
あきえ　ここに居ようよ。ここでお父さん待とうよ。
みちよ　……。
すみ　あきえちゃん？
あきえ　ここに居たらたまちゃんの病気だって良くなるよ。お願い。ここに居よ。
すみ　……どうしちゃったん？
みちよ　すみ。あんたここにおって。わたし男の人呼んでくる。
すみ　は？
あきえ　ここに居て！　お願い！
みちよ　あきえちゃん。わたし、みちよ。よう見て。おばさんちゃうよ。
あきえ　私がわがまま言ったから、たまちゃん、ごめんね。
みちよ　よう見て。たまちゃんちゃうよ。すみちゃんやで。もう日本に帰って来とんやで。

あきえ　私が、私が、（と、泣き続ける）
みちよ　すみちゃん。ここにおって。すぐ戻って来るさかい、

みちよの合羽の裾を牛が咥える。
再び山崩れの轟音。先ほどよりさらに近い。

すみ　お姉ちゃん、あれ、神社の方ちゃう？
みちよ　……。
すみ　みんなぁ大丈夫かなぁ？

あきえがすみのおでこに手をあてる。

あきえ　お母さん、たまちゃん熱下がっとる。
みちよ　……。そやね。
あきえ　良かった！（と、すみを抱きしめる）
みちよ　（ややややけくそに）あぁもう！

みちよは「かりんとう」をワシづかみする。
そして二人と一緒に牛の傍に座り、かりんとうをバリバリ食べる。

すみ　お姉ちゃん。
みちよ　何？
すみ　怖い？
みちよ　（かりんとうを食べながら）怖いよ。
すみ　（笑って）頂戴。

三人はかりんとうを食べる。バリバリと木々が押し流される音が近づく。
三人と牛は恐怖と緊張のあまり身を寄せ合う。
みちよは唄う。
♪『ゴンドラの唄』（作詞・吉井勇　作曲・中山晋平）
みちよが歌い出した途端、今までにない近さの山崩れの音。
濁流があちこちの民家を呑み込んでゆく。
台所の方から濁流が押し寄せる。壁が押され、柱が傾く。
三人は手をつなぎ、声を枯らして『ゴンドラの唄』を叫ぶ。
（舞台奥の）壁を突き破り居間を濁流が走る。
暗転。

薄い月明かりが居間を照らす。
泥水だらけになった居間。三人は泥に埋もれ気絶している。
牛の姿はない。
やがてすみが目をさます。口中の泥を吐き、顔の泥を拭い、辺りを見回す。

すみ　……お姉ちゃん、お姉ちゃん！！

みちよも目をさます。二人は命あることを喜び合う。
あきえを探し出す。あきえは気を失っている。息を確認する。

みちよ　（ささやくように）あきえちゃん、
すみ　（姉があきえを起こすのを制するように）あのさ。たまちゃんって、妹さん？
みちよ　（うなづく）
すみ　いま、どこにおるん？
みちよ　（わからないと、首を横にふる）
すみ　死んじゃったん？
みちよ　（首を横にふる）あんた、おばさん憶えとるやろ？
すみ　うん。
みちよ　可愛がってもろとったもんな。たまちゃん、アンタと同い年やって。おばさんも嬉しかった思うわ。
すみ　……。
みちよ　おばさん、病気ちゃうんよ。自殺しちゃった。
すみ　なんで？

玄関先からペスが吠える声。
あきえが目をさまそうとしている。

みちよ　（すみに）誰にも言うたらアカンで。

あきえが目をさます。口中に残る砂利をしきりに吐き出す。

みちよ　（あきえに）大丈夫？
あきえ　（口に残る泥を吐き）お風呂、入りたい。

みちよは笑う。
舞台ゆっくり溶暗してゆく。

三人は互いに助け合いながら泥をかき分け、居間を出てゆく。
暗転。

一幕三場　昭和三十三年七月

居間の窓はあいており蝉の声が聞こえる。
水害から五年過ぎ、家はあちこち立て直されている。
かつて居間を飾っていた剥製や、煙草の空き箱でつくった様々な小物類は姿を消し、代わりに赤ん坊の揺り籠や、幼児用の玩具などがあちこちに散らばっている。
ちゃぶ台で高校生のすみが勉強をしている。
みちよは川谷と駆け落ちし、家を出た。
あきえは専門学校を卒業し、舞鶴の美容院で働いている。
すみのはす向かいで信介が神妙な面持ちで座っている。
すみは急に立ち上がる。そして居間の隅におかれた蜜柑箱を覗く。すっかり寝たきりになったペスは蜜柑箱に毛布を敷いて看病されている。

信介　あの、ごめんな。急に来てしもて。
すみ　……。
信介　邪魔かなァ？
すみ　邪魔ですね。（と、ちゃぶ台に戻る）
信介　じゃ。（と立ち上がろうとする）
すみ　どうぞ気にせんといてください。
信介　でも、
すみ　せっかくいまそかりくださったんですから、
信介　え？　……あ、あり、おり、はべり、
すみ　いまそかり。よー覚えてますね。
信介　うん。語呂かな。意味はあれやけど、
すみ　なくよウグイス、
信介　平安京。
すみ　水兵リーベ、
信介　僕の船。
すみ　おぉ。
信介　意味は忘れたけど、
すみ　語呂、大事ですね。
信介　うん、映画のタイトルも一緒やで。お客さん入るかどうかも、語呂でわかる。『戦場

にかける橋』。
すみ　ほー、
信介　『翼よ！あれがパリの灯だ』。
すみ　うーん。
信介　『第三の男』。
すみ　『風と共に去りぬ』。
信介　そう。それ。
すみ　あの頃、わたし小学生やったんです。
信介　そうか、僕もまだ高校生やったもんなぁ。学校が休みの日は、映写技師の見習いしとった。よう怒られた。
すみ　私、ものすごいからかわれとったんですよ。
信介　は？
すみ　学校で。信介さんとあきえちゃんのことで。
信介　あ、
すみ　二人で映画始まる前にロビーでお喋りしとったでしょ。ほんで上演時間が来ても準備できんと、お客さんが怒りだして、
信介　あぁ…。
すみ　その話、ウチの学校でも広まってしもて。あれ、お前んとこの従妹やろ言われて、
信介　ハハハ。（すみの方を向き）どうも、すみませんでした。
すみ　いいえ。

信介は立ち上がる。そしてペスの様子を見る。

信介　名前？
すみ　ペス。
信介　ペスー（と手をのばす）。
すみ　ダメ。
信介　え？
すみ　今寝てます。

信介は腕時計を見る。そして居間の時計も見る。
二つの時計は時間が合わない。

すみ　十五分遅れてます。
信介　え？
すみ　この時計は十五分遅れてます。

信介　あ、なるほど。
すみ　でもそんな正確には帰ってきませんよ。お父ちゃん、山降りてしもとるし。
信介　お忙しい中、ありがとうございます（と、元の場所に戻る）
すみ　えらい驚いてました。俺に何の用やろって。
信介　やっぱり邪魔やんな、
すみ　邪魔です。
信介　ほんな外で待っとこっかなぁ、玄関先で、
すみ　ご近所に変に思われますから。
信介　でも、勉強、
すみ　慣れてますから。
信介　は？
すみ　むしろ静かな方が集中できんので、それにペスのことも見んなんし。
信介　でも邪魔でしょ。
すみ　邪魔です。
信介　え？　もしかして邪魔した方がいい？
すみ　そんなわけありません。
信介　やんな。
すみ　なんで一人で来たんですか？
信介　（いきなり倒れこむ）あぁ！！！
すみ　びっくりした。
信介　僕とあきえさん、今年でもう（指折り数え）あれ？
すみ　六年。『風と共に去りぬ』は五年前ですから。
信介　そうか。六年か。
すみ　で、今日は父に何の話をしに来たんですか？
信介　そらぁだって六年やろ、僕かって考えるで。
すみ　でも、そーゆー大事な話って、普通二人で来ません？
信介　そやけど、
すみ　今日あきえちゃんお仕事やし、お父ちゃんと信介さんの二人だけで話すって、なんか変やわ。
信介　そやけどそれは、だって、

信介は腕時計を見る。

すみ　あと五分。
信介　今日僕がここ来るん、あきえさんには言うとらんのや。だって、もう六年やけど、あきえちゃんこの話になるといっつも黙り込むさかい。

すみ　でしょうね。
信介　そら僕かってお父さん帰ってきたらこんな嬉しい話ないけど。でもわからん話やん。
　その為に僕らの結婚がどんどん先へ先へ行ってしもたら、もうかなんのや。
すみ　聞いてます？
信介　え？
すみ　あきえちゃんのお母さんの話。
信介　うん。
すみ　何て？
信介　そやしこっち帰って来て、病気で、
すみ　なるほど。
信介　それかてもう十年くらい前の話やろ。オジサンとオバサンが育ての親やん。二人がえ
　え言うたら僕らのこと先に進めても、全然おかしない。思わん？
すみ　あと三分なんで手短に言いますね。ウチの姉のことはご存知ですよね？
信介　みちよさん。
すみ　駆け落ちしたんですよ。あきえちゃんから聞いてません？
信介　相手が学校の先生っていうのは、
すみ　はい。そして、連れ子もいるんです。それでウチの親に反対されて、式もなんにもせ
　んと籍入れました。今は京都市内住んでます。だからウチの親からしたら、次こそ円
　満に嫁がせたいと思とるはずです。信介さん。
信介　はい。
すみ　最初からボタン掛け違えとる思いませんか？
信介　……。
すみ　あきえちゃんに内緒で来るなんて、お父ちゃんからしたら返事のしようもないやん。
信介　グゥ———。
すみ　でた「ぐぅ」の音。ほんでもう一つ。
信介　はい。
すみ　待ったげてください。あきえちゃんのこと思うんやったら、
信介　……。

　ガラガラと玄関の戸が開く音。

すみ　（時計を見て）ぴったり。

　玄関から子供の声で「電話、オジサンから」と聞こえる。

すみ　（玄関に）あ、はい！（信介に）ちょっと、行ってきます。

すみは廊下から玄関に向かう。そのままご近所の電話に。
信介は一人になる。信介は立ち上がり、蜜柑箱に寝そべるペスを覗く。

信介　……ペス。……あ、起きた。ごめんね。僕、橋爪信介。映写技師してます。……
……待ったげてか……そらぁ僕かってわかっとるって。でも……。（手をのばし）よ
ろしくー（咬まれる）イタ！

玄関からあきえの声。

あきえ　（声のみ）ただいまー、
信介　あれ？
あきえ　（居間に向かいながら）あー暑、すみちゃんお菓子買ってきたでー、

あきえは廊下から居間にやってくる。

あきえ　（驚き）なんで？
信介　いや、だって、
あきえ　おばさんは？　すみちゃんどこいっちゃたん？
信介　あ、いますみちゃん電話、あれ？　今日は仕事ちごたっけ？
あきえ　午前中だけ。
信介　あ、そう。
あきえ　……。こないだ話したやん、
信介　うん、ほんでな、あれから考えたんやけど。やっぱり、僕は、僕は、あきえちゃん
と一緒におりたい。
あきえ　……。
信介　君に内緒でお見合いしたんは本当に申し訳ない。
あきえ　正確に言ってください。
信介　君に内緒で十七回もお見合いを繰り返していたのは本当に申し訳ない。でもな、僕
は、
あきえ　結婚がしたかった、
信介　違う、君と結婚がしたいんや、
あきえ　じゃあなんで十七回もお見合いしとんの？
信介　グゥ。
あきえ　何しに来たんですか？
信介　……、

あきえ　もしかして信介さん今日一人でオジサンに挨拶するつもりやった？
信介　……だって、
あきえ　帰って。
信介　……。あんな、
あきえ　父は帰って来ます。
信介　……もう戦争が終わって十三年やで、みんなぁ変わっていく、大胆に変わる奴もおるし、ちょっとずつ変わる人もおる。というか変わらんと生きていけん。だって世の中も変わるし、そもそも時間は過ぎていくんやし、
あきえ　……、
信介　そらぁ怖いで。変わっていくんは誰かって怖い。でも変わろうな、
あきえ　……、
信介　大丈夫。僕がおるし……。な、結婚しよ。

あきえは廊下から玄関に。そのまま外に飛び出してしまう。

信介　（蜜柑箱を覗き）ペス。（背中を撫でる）（ペスは心地よさそうにウトウトする）眠いか……そのまま死なんといてな、僕がなんかやらかしたみたいに思われたら困るしな……目つぶるだけやで。……（撫で続けると、ペスは目を閉じる）アカンで、目つぶるだけやで、……ペス！（ペスは目をあける）びっくりした。からかわんといてーな、

すみが急ぎ足で駆け戻ってくる。
息を切らし廊下から居間に駆け込む。

信介　どうしたん？
すみ　九月に引揚げ船来るんやって！
信介　へー、
すみ　帰ってくる！　その船にあきえちゃんのお父さん乗っとんやって！
信介　ほんま！
すみ　うん。いまお父ちゃんが電話で知らしてくれた。こっちより先にあきえちゃんのお店に電話したんやけど、ほしたら今日は午前中までや言われちゃって、もうすぐ、来た。
信介　え？
すみ　もう帰って来た、いまさっき、
信介　（台所へ走り）あきえちゃーーーん、
すみ　（台所に向かって）外！！

すみは「あきえちゃーーん」と叫びながら、台所を抜けて玄関へ去る。
そのまま外に。
舞台ゆっくり溶暗してゆく。
信介の顔から次第に笑顔が薄れ、不安の色が濃くなる。
ペスのいる蜜柑箱を覗きこみ、

信介　……。変わっとるって。あきえちゃんのお父さんかって、

暗転。

第二幕　海の映画館

二幕一場　昭和三十九年九月下旬

すみは高校を卒業し地元舞鶴の観光バスの会社に勤めている。
信介は親が経営する映画館の二代目として忙しく働いている。
その映画館が二幕の舞台。

映画館「浮島劇場」のロビー。
明治以降、海軍の街として栄えた東舞鶴。「浮島劇場」も元を辿れば海軍の娯楽施設だった。終戦直後は進駐軍に管理され、夜な夜なビッグバンドが演奏する「社交場」になっていたが、しばらくして民間に移り、主に洋画をかける映画館「浮島劇場」として生まれ変わった。
建物のすぐそばは海。穏やかな波が陽を照り返し、キラキラと輝いている。

ロビーには、三人掛けのベンチがいくつかと、自動販売機、ゴミ箱、チラシ用のラックなどがある。
舞台正面にはホールの重い扉があるが、劇中これは使用されない。
舞台上のデハケ口は三つ、下手前、下手奥、そして上手にある。
下手前のデハケ口は、売店やモギリに通じる。
下手奥のデハケ口は、二階客席や映写室にゆくための階段になっている。
上手のデハケ口は、手洗いや従業員しか入れない物置に通じている。
「売店」も「モギリ」も「手洗い」も「物置」も客席からは見えなくて良い。

時刻は夕方。館内から上演開始のベルが聞こえる。ロビーには誰もいない。
ロビーのあちこちに現在上演中の『大脱走』のポスターが貼られている。
売店・もぎりの方から（下手前）から、みちよが現れる。
手には土産とおぼしき紙袋。懐かしそうにロビーを見まわしている。
階段（下手奥）から信介が降りてくる。
汗だくで首にタオルを巻いている。手にはコカコーラの瓶と団扇を持っている。
みちよに気づかないまま、ロビーの椅子に座りコーラを飲む。

みちよ　お邪魔します。
信介　（気が付いて）あ、いらっしゃい。いま始まったばっかりやし、どうぞ。
みちよ　あの、
信介　二階の桟敷が良かったら、そこ（下手奥）に階段あるしね。
みちよ　信介さん？
信介　……、
みちよ　私、あきえちゃんの、
信介　あ！　お姉さん？
みちよ　はい。
信介　あぁどうも、お久しぶりです。
みちよ　はい。みちよです。
信介　すんません。こんな格好で、映写室、蒸し風呂になっとって。
みちよ　いえ、お気になさらず。
信介　えっと、
みちよ　すいませんちょっと早かったみたいで。
信介　いえいえ。すみちゃん会社は昼に抜けられる言うとったで、そろそろ来る思います。
みちよ　はい。
信介　あ、お姉さん何か飲まれます？
みちよ　あ、
信介　どうぞ座っとって。
みちよ　はい（座る）。
信介　コーラでよろしい？
みちよ　あ、ありがとうございます。

信介は売店（下手前）にコーラを取りに行く。
しばらくして信介が戻ってくる。手に傘を持っている。

信介　お姉さん、傘つかってください。

みちよ　え？
信介　雨が降ってきましたわ。
みちよ　そしたら帰りに、
信介　そやね、じゃここ置いときますし。（と、傘をみちよの側に置く）……ま、後でええか、帰りには止んでるかもしれんしね、むこう置いときます（と、傘を持って再び売店の方へ去る）。

みちよはそんな信介を少し笑う。
しばらくして信介が戻ってくる。手にはコーラの瓶とグラス。

信介　どうぞ。
みちよ　あ、（手をカバンに伸ばしかけ）
信介　いえ、そんな、
みちよ　でも、
信介　いえいえ。
みちよ　じゃ（グラスを取る）
信介　（コーラを注ぎながら）観ました？
みちよ　え？
信介　「大脱走」
みちよ　いえ、
信介　去年の映画なんやけどね、もういっぺんかけてるんですわ。
みちよ　人気あるんですか？
信介　そらもう。二回目三回目のお客さんばっかり。
みちよ　へー。
信介　でも今日はあかん。スカスカ。皆、明日のことで頭いっぱい。駅前、見ました？
みちよ　ええ。
信介　浮ついとるでしょ、まるで舞鶴でオリンピックしよるみたい。
みちよ　ハハ。
信介　たかが松明持って走るだけのことに、何を浮かれとんや。僕らァからしたらええ迷惑ですわ。
みちよ　すんません。
信介　え？
みちよ　ウチの息子が明日走るんです。
信介　……へ？
みちよ　松明持って走らしてもらいます。
信介　（大声で）ほんまに！！！（上演中であることに気づき、声を抑え）それはそれはお

めでとうございます。
みちよ　ありがとうございます。あの子から聞いてません？
信介　何にも。お姉さん来るからあんたんとこのロビーで会おうって、それだけ。
みちよ　（困って）もー、
信介　どこを走りますの？
みちよ　中舞鶴の国道の辺です、
信介　あの寿司屋の辺ですか？
みちよ　はい。ちょうどその辺や思います。いま主人と一緒に明日の下見に、
信介　そうですか。それはめでたい。うん、うん。
みちよ　どうぞ、お仕事中でしょ、わたしここで待たせてもらいますし。
信介　いえいえ、そんな、（時計を見て）じゃ、ちょっとだけ、（階段に向かう）
みちよ　はい。
信介　（立ち止まり）今夜はどちらに？
みちよ　駅前に宿とってます。
信介　そうですか。
みちよ　主人も息子もいますし。
信介　そうですよね、そらその方がええと思います。

信介は映写室に戻るため階段を上ってゆく。

みちよ　そら、そのほうがええ……か、

モギリの方から川谷が現れる。雨に濡れている。

みちよ　アンタ、切符は？
川谷　お前の名前だしたら、通してくれた。
みちよ　下見は？
川谷　ダメ。
みちよ　喧嘩？
川谷　……走ってるところを、見られたくないって。そんな聖火ランナーあるか？　それで馬鹿言うな、明日は日本中に見られるんやぞって言ったら、お父さんには見られたくないって。
みちよ　だからって一人にするやなんて、
川谷　大丈夫。あいつ案外この街のこと憶えてるわ。宿への帰り道もちゃんと教えた。
みちよ　アカンって、
川谷　大丈夫。（周りを見回し）しかし、懐かしいなぁ。たしか二階に畳が敷いてあって、

みちよ　上演中やし、静かにして。
川谷　（ポスターを指さし）ハハ一年遅れだ。
みちよ　（モギリに向かう）
川谷　やめろよ。
みちよ　でも、
川谷　甘えてるだけだから。
みちよ　……、
川谷　よそよそしく感じるんだと思うよ、君が気を使うほど、
みちよ　……、
川谷　（自分の眉間を指さし）ここ。シワ寄ってる。

川谷はみちよのそばにあったコーラのグラスを手に取る。
そしてひと息に飲み干そうとするが、むせる。

みちよ　おぼえとる？　奥さんが結核で入院した時。アンタ、ウチの家、遊びに来た。
川谷　……。
みちよ　わたし寮でするクリスマス会の支度しとって、
川谷　あぁ、
みちよ　あの日、私が俊章くんどうしてんの？　って聞いたらあんた友達んとこ遊びに行ったって、
川谷　……。
みちよ　嘘つき。ほんまはあの子、お母さんの病院行っとったんやろ、亀岡まで一人で電車乗って、
川谷　憶えてない。
みちよ　わたし、あんたと結婚して後悔はしてへんよ。でも、
川谷　わかる。
みちよ　何が？　何がわかるん？
川谷　じゃ、わからん。
みちよ　何で？　何でわからんの？
川谷　どうすりゃいいの、
みちよ　まず、……標準語と関西弁混ぜんといて。
川谷　そこ？
みちよ　気持ち悪いん。
川谷　すんまへんな。
みちよ　行ったげてよ。
川谷　しゃーないやろ、本人が見られたくない言うてるんやから。

みちよ　でも、
川谷　幾つなった思ってんねん。
みちよ　……。あの子、私らに復讐したいんちゃうやろか。
川谷　は？
みちよ　なんでわざわざ舞鶴で走るんの？　京都の方が友達も多いし、楽しい思い出もいっぱいある。
川谷　あいつはここで生まれたんや、なんもおかしいことあるかい。
みちよ　忘れてへんぞって、私らに見せつけたいんや、
川谷　……。
みちよ　自分の母親が結核でもうアカン言う時に、わたしらが何しとったか、
川谷　あのな、お前、ちょっとおかしんとちゃうか？お前、そんな顔やなかったぞ、鏡見てよー考えろ。
みちよ　……。
川谷　せっかく舞鶴来たんや、いっぺんお父さんにも会うたらええねん。……。知らんけど、

川谷はモギリの方に向かう。

みちよ　どこ行くん！
川谷　どこでもええやろ、
みちよ　俊章さん見に行ったげて、
川谷　はいはい。
みちよ　お願い。
川谷　はいはいはい、

川谷は去る。

川谷　（声のみ）傘、借りるー
みちよ　アカン！

みちよもモギリの方に去る。
するとそこですみと鉢合わせしたようだ。
二人の声のみが聞こえてくる。
その間に、川谷は傘を持って映画館を去ってしまう。

すみ　（声のみ）　お姉ちゃん！

すみ・みちよ（声のみ）　久しぶり！！
すみ　（声のみ）　いやー嬉しいわ、
みちよ（声のみ）　ほんまや、

二人はロビーにやってくる。

すみ　何年ぶり？
みちよ　私が家出して、次の年、すみちゃん京都来てくれたやん。
すみ　豆餅、
みちよ　そうそう豆餅お土産にもろた。
すみ　十年？　え、もっと前？
みちよ　もう考えたない。
すみ　ウチ、声、枯れとるやろ？
みちよ　そうか？
すみ　毎日大きい声ばっかり。嫌んなるわ。
みちよ　全然枯れとらん。昔のまま、
すみ　ありがとう。
みちよ　（手土産を渡す）豆餅。
すみ　あはははは、
みちよ　あの時、美味しそうに食べとったやん、
すみ　自分が持って来たのにな。あ、さっきの川谷さん？
みちよ　うん。まぁ大丈夫。
すみ　でも、
みちよ　お仕事忙しいん？
すみ　（バスガイド口調で）「皆さま左をご覧くださいませ」
みちよ　すごーい。
すみ　毎日こればっかり、
みちよ　ええなぁ色んなとこ行けて、
すみ　全然。おんなじとこばっかりやで。一回でよいで東京やら行ってみたいわ。
みちよ　そうか。働いとるんやな。
すみ　俊章くんおめでとう。
みちよ　いま明日の準備しとる、
すみ　浮かれとるやろ、
みちよ　は？
すみ　舞鶴。
みちよ　日本中や。

信介が階段を降りてくる。何かトラブルがあったらしく急ぎ足。

信介　おぉ来た来た。
すみ　うん。
信介　そこ、お姉さん、
すみ　見たらわかる、

信介はそのまま物置の方（上手）に去る。

みちよ　元気そうやん。
すみ　宿どこにしたん？
みちよ　駅前の、
すみ　そっか。お父ちゃんに言うたで、俊章くんが走ることも言うた。
みちよ　……へー。
すみ　（笑う）お父ちゃんも「へーー」って、
みちよ　（固く、そっけなく）そう。
すみ　どっかで時間できひん？
みちよ　え？
すみ　いや、お父ちゃん、時間あるんやったら会うてもええって、
みちよ　……
すみ　山の上もだいぶかわったんやで、何年か前の大雪であかんようなった家もようけあってな。ウチの家もぼちぼちあかんかもしれん。
みちよ　……。
すみ　二十分でええから、

上手から信介登場。

信介　フィルムが切れてもた。去年の映画やけど、何べんもかけとるでしょ、そやし、

と、階段を上ってゆく。

みちよ　ごめん。
すみ　……そうやんな、ごめんな無理言うて、
みちよ　うん。
すみ　どうしょー、喋りたいことといっぱいや、

みちよ　ウチも。
すみ　ほっといていいん？　川谷さん。
みちよ　あぁ、うん。そっちはどうでもええんやけど、
すみ　そっち？
みちよ　ま、大丈夫。あとで追いかけるわ。
すみ　あ、これ。

すみはカバンからカメラを取り出す。かつてあきえの家族が満州で使っていたカメラだ。

みちよ　これ……、あきえちゃんのお父さんの？
すみ　明日つこて、
みちよ　なんですみちゃんが持っとるん？
すみ　あきえちゃんがくれたん。オジサンがもういらん言うたんやって、
みちよ　でも、これ、大事なもんなんやろ、
すみ　おじさん。辛いんやって。これがあるん。でも捨ててしまうわけにいかんし。あきえちゃんと相談して、私が預かっとるん。
みちよ　……そっか。
すみ　昔、私らぁ小学生やったころ、桟橋に並んで、船が見えたらみんなぁで旗ふって。「お帰りなさい」って。
みちよ　そうやったなぁ。
すみ　私、子供やったし、桟橋で待っとる家族の人らぁが泣いとるん見て、一緒になって感動して、よかったよかった思とったけど。あれは、始まりなんやな。
みちよ　……。
すみ　正直おじさん怖かった。だって目が動かんのやもん。たまちゃん置いてきたことも、奥さんが自殺したこと聞かされても、何考えとんかわからへん。そしたらあきえちゃん自分のせいや言い出してな。二人のこと止めれへんかった自分が悪い言いだして。「そんなことない」って言うてあげたらええのに。おじさん何も言わへん。
みちよ　わたし舞鶴から離れてこの町のこと少しわかった気がする。
すみ　どんな風に？
みちよ　……。わからへん。
すみ　何それ。
みちよ　そんなん言葉にできへんよ。でも、何十万の人が、舞鶴って町の名前に胸をドキドキさせて。船から、舞鶴の山を見て、自分の故郷のことを思って。この町の人もその人らぁによりそって、でも、ウチらぁ、よりそうことしかできひん。

階段から汗だくの信介降りてくる。

信介　お、そのカメラ、

とだけ言って売店の方に去る。すみとみちよはそんな信介を笑う。
やがて信介が戻ってくる。手には二本のコーラを持っている。

信介　いやー、去年の映画やしそんな古ないんやけど、何べんもかけとるでしょ、いかんわ。（コーラを差し出し）はい、どうぞ。

すみ　ありがとう。

みちよ　すみません。

信介　そのカメラ、

すみ　うん。お姉ちゃんにつこてもらお思て。

信介はみちよにコーラをつぐ。

すみ　ちょっと、わたしのコップは？

信介　そのまま飲んだらええやんか。

みちよ　なんや二人仲よなったね。

すみ　あきえちゃん引っ越してからこの人毎日やで。「なんか連絡ありませんかー」って。

信介　そらそうや。婚約者が突然おらんようなったんやで、

すみ　だ、か、ら。婚約はしとらんやろ。

信介　すんませんなぁ女々しゅうて。

みちよ　（笑う）良かった。

信介　何が？

みちよ　信介さん、なんて言うか、もっと荒れてるか思ってた。

信介　……、

すみ　（信介の背中を叩き）ウチのおかげやんな。

みちよ　今頃どうしとってやろ。

すみ　あきえちゃん？

みちよ　手紙書いたんよ。でも返事こーへん。もう思い出したないんかな、この町のことも、私らのことも。

三人は黙り込む。

すみ　（笑顔で）うん、良かった！

みちよ　え？
すみ　みちよちゃんと会えたし、この人は元気やし。
みちよ　……、
すみ　大丈夫。きっと元気にしとるって。

館内から観客の声。「おーい、また切れたぞ」

信介　はいよ。ちょっとすんません。

信介は階段を上がってゆく。

みちよ　すみちゃん、綺麗（きれ）なったね。
すみ　何よ。変なこと言わんといて。
みちよ　私、最近ここ（眉間）に、
すみ　なに？
みちよ　縦じわできてしもた。
すみ　どこ？　（と、みちよの顔を見る）全然大丈夫や、
みちよ　そぉか？
すみ　……。
みちよ　どしたん？
すみ　あんな、ウチの結婚式、お姉ちゃんも来てくれる？
みちよ　え？　話あるん？
すみ　もしもの話。
みちよ　……。
すみ　お父ちゃんもう六十やで。いつまで喧嘩するん？　可哀そうやん。
みちよ　アカンよ。
すみ　え？
みちよ　わたしお父ちゃんに会わせる顔ないわ、
すみ　そんなん関係ないって、お父ちゃんからしたらお姉ちゃんが元気な顔見せてくれるだけで、
みちよ　私が嫌なん。私が許せんの。自分のこと。
すみ　……。
みちよ　さてと。じゃ、私ちょっと見て来るわ。俊章さん。いま一人でおるんやって。
すみ　雨降っとるで。
みちよ　うん。

階段から信介降りてくる。

信介　あれ？　もう行くん？

みちよ　うん。また明日。

すみ　明日楽しみやな。

信介　ほんまや。

すみ　写真、しっかり。

みちよ　わたし使えるやろか？

信介　フィルムも入れといたし。

みちよ　え？

すみ　わからんことあったら川谷さんに聞いたらええよ。

みちよ　うん。

みちよはモギリの方に去る。

それを見届けた後、信介とすみは手を握る。

信介　言えんかったなぁ。俺らぁのこと。

すみ　そんなん、……言えるわけないやん。

二人は力強く握りしめる。

モギリの方からみちよが戻ってくる。

すみと信介は慌てて手を離す。

みちよ　すんません。傘、借りてもいい？

舞台ゆっくり溶暗してゆく。

みちよ　ごめんなさい。なんかさっき用意してくれた傘を主人がつこてしもて、

信介　いいんです、いいんです、まだまだありますし、

みちよと信介はもぎりの方に去る。すみのみがロビーに残る。

暗転。

幕間①　あきえからすみへ

舞台上にあきえ登場。すみへの手紙を読み上げる。

あきえ　すみちゃん結婚おめでとうございます。すみちゃんと信介さんが結婚するなんて本当にびっくりしました。でもよくよく考えれば二人はとってもお似合いだと思いました。少し慌てんぼうの信介さんには、しっかり者のすみちゃんがピッタリだと思います。おめでとう。また長い間手紙の返事を出さなかったことをお詫び申し上げます。これまでみちよちゃんとすみちゃんから頂戴した手紙はぜんぶ手元に残してあります。すみちゃんがバスガイドになったこと、みちよちゃんの息子さんが聖火ランナーに選ばれたこと。お二人が人生の時計をどんどん先に進めてゆくのに比べて、私の生活の変わり映えのなさを、情けなく思い、お返事を滞らせてしまいました。お許しくださいませ。

私はいま東京におります。父と一緒に東京の立川という町で、スポーツ用品のお店をしています。父と私と従業員の三人だけの小さな会社です。当初は学校を相手に体操服などを売っていましたが、立川は若い家族が沢山住んでおり、少年野球チームや、ママさんたちのバレーボールチームなど次々に生まれ、今ではそちらも相手に商売をしております。

実は私も結婚をしました。相手は一緒に働いている従業員の方です。父も以前よりずっと明るく昔の姿を取り戻しつつあります。ようやく私たちの時計も動きはじめました。舞鶴を出てからもう何年たったでしょう。庭の栗の木、その下で寝そべるペス、神社の石段、三人で寮の子供たちの為にクリスマス会の準備をしたこともありましたね。今も懐かしく思い出します。またお会いしたいです。末筆ではございますが、改めてお二人の幸せを祝福いたします。あきえより。

二幕二場　昭和五十六年一月

浮島映画館のロビー。外は大雪。ダルマストーブが燃えている。
信介とすみが結婚し十数年が過ぎ、子供も二人いる。
上の息子浩介は、この冬高校受験を控えロビーで勉強。
その教科書やノートがロビーの低いテーブルに散らかっている。
すみはティシュの空き箱を片手に勉強の監督をしている。
浩介が字を書き損じ、シャーペンで黒く塗りつぶす。

すみ　（ティッシュの箱で頭を叩く）消しゴム使いなさい。
浩介　つことるやん。
すみ　つこてないでしょ。
浩介　スピードの方が大事なの。
すみ　は？

浩介　だから考えるスピード。消しゴム使うとブレーキかかりよる。
すみ　落ち着いて考えなさい。
浩介　もう俺にはテンポしかないの。
すみ　（ティッシュの箱で叩く）
浩介　体罰反対！
すみ　まず落ち着いて問題を読む。
浩介　（恐ろしく早口で）「連続する２つの自然数の積は２の倍数になる。このことを証明しなさい」
すみ　ゆっくり読みなさい。問題の意味わかるから、
浩介　もー、
すみ　お母さんも一緒に考えたげるから、
浩介　（ゆっくり読む）「連続する、２つの自然数の積は、２の倍数になる。このことを、証明しなさい」
浩介・すみ　……。
すみ　（浩介から逃げるように）お父さーん。

すみはロビーを見渡す。

すみ　あれ？　和子もおらんやん。
浩介　お父さんと一緒。
すみ　え？
浩介　雪かき。このまま振り続けてな、世界が雪に閉ざされたら、お母さんどうする？
すみ　（浩介を無視して）晩ご飯。どうしょー。お店、開いとらんかなぁ。
浩介　さぁ、映画館が閉めとるぐらいやしな。
すみ　ま、お餅があるか、
浩介　って言うか今年受験無理なんちゃう？
すみ　それはないわ。
浩介　でも、二メートルやで。雪。
すみ　……（和子を案じている）
浩介　大丈夫。あいつ雪かきうまいもん。
すみ　でも、
浩介　山の家、大丈夫かな、
すみ　もう誰も住んどらへんで、大丈夫や。
浩介　あの家ってな、
すみ　何？
浩介　あの家ってな、売ったらお金になるんちゃう？

すみ　売れるかいな。
浩介　リニアモーターカー。
すみ　は？
浩介　あの辺にリニアが通ったら土地の値段もあがるんちゃう。
すみ　浩介。あんたも雪かき行ったら、
浩介　無理。
すみ　なんで？
浩介　勉強しとるやん。
すみ　しとらんやん。
浩介　お母さんが喋りかけるでやん。
すみ　はいはい。
浩介　……明日世界が滅ぶんやったら、お母さん何する？　俺は、オレンジの木を植える。
　　たとえ明日世界が滅ぶとしても。俺はそういう男なんや。
すみ　やっぱり和子見てくる。

　　すみはモギリの方に去る。
　　浩介は退屈。教科書（地理）を逆さまに見たりする。
　　すみ戻って来る。

すみ　あかん。この格好で、外は無理。
浩介　ほやで二メートルやって。

　　すみは上手に去る（その先に従業員用の物置がある）。

浩介　（逆さにした教科書に見入り）うーーーん。

　　すみ、長靴と雨合羽を持って戻ってくる。
　　ロビーでそれを着始める。

すみ　勉強しな。あと六週間やで。
浩介　うーーん。
すみ　どうしたん？
浩介　日本地図、逆さまにしてみた。（と、教科書をすみに見せる）
すみ　それで？
浩介　日本海って湖みたいやなぁ。
すみ　そうか？

浩介　大陸と島に囲まれとる。
すみ　まぁな。
浩介　大陸のこの辺り（と、沿岸部をさす）から、舞鶴まで、巨大な橋を架けるんや。
すみ　ほぉ、
浩介　ほんでそこにリニアモーターカーを走らせる。
すみ　え、
浩介　ほしたら舞鶴の土地の値段が跳ね上がる、
すみ　……。
浩介　俺、一生、遊んで暮らせる。どう？

すみは長靴と雨合羽を着終える。外に出ようとした時、電話の音。モギリにある赤電話がなる。すみは電話に向かう。すみの声のみがロビーまで響いてくる。

すみ（声のみ）　はい。浮島映画館です。あ、お父ちゃん、そっちどう？　大丈夫？　そう。よかった。こっち？　すごいで。映画館は閉めとる。臨時休業。いま雪かきしよ思て。前の通りがものすごい積もって、扉もあかへん。たいへんやーこんなん見たことないわ。……新聞？　うん今朝は来たで。夕刊は来るかどうかわからへんけど……、うん、うん、……、

すみはロビーに駆け込んでくる。

すみ　新聞！

浩介とすみは慌てて新聞を探し、見つける。
すみは新聞を広げる。新聞にはジュースをこぼしたシミがある。

すみ　あ！あんたこぼしとるやん！
浩介　ちゃうわこぼれたんを新聞で拭いたの。
すみ　もー（しわくちゃの新聞を広げ、記事を探す、そしてそれらしき記事を見つけるが）、もーどーするん読めんやんか、

☆以下のセリフは朝日新聞１９８０年1月１１日東京朝刊を参照

浩介　（新聞を手に読みあげる）…中国に残された日本人孤児のうち、まだ身元がわからない人たちについて、厚生省は十日、八回目の資料公開をしました。

そこまで読んで浩介はすみに新聞を渡そうとする。
しかしすみは受け取らない。続きを読めと浩介に促す。

浩介　その内容をもとに、民間で同じ運動を続けている「日中友好手をつなぐ会」と「日中孤児問題連合会」の資料。更に、昨年夏、中国にこの孤児たちを訪ねた「凍土の会」の資料も合わせて十三回目の「生き別れた者の記録」を特集します……

すみは浩介から新聞を受け取り、目を皿のようにして記事を読む。
その鬼気迫る姿に浩介は驚き、かける言葉がない。
それまでダルマストーブの音しか聞こえなかったロビーに、波の音が高まる。
波音の高まりに合わせて、舞台にあきえとみちよ登場。
すみ同様に新聞の紙面を食い入るように見つめている。

あきえ　祭香連（サイカレン）。ミチコと呼ばれていた。ハルピン市コウボウ訓練所（義勇隊香坊訓練所跡の収容所？）にいた。姉の話では両親は死亡。堀金蔵の紹介で中国人長公亮（チョウコウリョウ）を通じて養女になった。両方の足に二十以上、左足には親指ほどのイボがあった。

みちよ　張暁霞（チョウギョウカ）。昭和二十年秋、三十才ぐらいの母は、三人の子連れで避難中、方正県付近で、私を旅芸人姿の中国人夫妻に預けた。その時私は左の耳にできものがあった。

すみ　曹亜男（ソウアナン）。苗字は中村と呼ばれていた。父は錦州（キンシュウ）鉄道局の公安関係の仕事、母は外交員だった。商売をしていた古川を通じて、生後数か月の私を、横帆（オウホ）という店の経営者に預けた。

あきえ　殷淑清（インシュクセイ）。戦後、密山（ミツサン）の方から宝溝（ホウコウ）の方へ馬車で避難の途中、七台河（シチダイガ）から約一キロ来た橋の近くの畑に置き去りにされ、泣いているところを中国人に助けられた。持っていたお守りで、私は四才、父は兵隊とわかったらしい。それ以前住んでいたのはレンガ造りの家で、屋上に旗が立っていた。幼い頃から腰の部位が柔らかく、歩くとふらふらする。

みちよ　李桂栄（リケイエイ）。家族は父母と弟。桂木斯（ジャムス）から長春（チョウシュン）に避難したらしい。間もなく中国人に預けられた。私は右の頬骨あたりに小さなほくろがある。

すみ　王福栄（オウフクエイ）。父は軍人で、突然、最前線に召集され、母と兄と私は父の部隊を追って逃げた。行く先は人家はまったくなく背丈を没するほどの雑草が生い茂っていた。あるところでは、四方から銃声がして逃げるとき、私はかかとを踏み抜いてしまい、母に背負われて逃げた。一段落して汽車に乗ったが、また銃声、みんなは汽車から飛び降りて逃げた。その時、長兄は不明になった。歩いているうち母と私は下痢、病状が悪化して空き家を見つけて泊まった。母はそこで死亡。二つ年上の次兄が私を背負って大木の下で休んでいると、中国人に助けられた。兄は別の家にもらわれ、以来、会っていない。

みちよ　孫玉梅（ソンギョクバイ）。終戦の少し前、父は召集された。母と姉と私は天蓋のない汽車に乗っていたが、途中で降りてしまった。畑のなかを歩いた。目をさますと牛小屋で寝ていた。母と姉はいなかった。そこで養父母に拾われた。父は写真が好きだった。家には家族をうつした写真がいっぱいあった。自分の名前は憶えていない。

みちよの読む記事に、あきえもすみも引き寄せられる。
舞台溶暗してゆく。飛行機の音。海峡を越えてゆく。
暗転。

劇中劇「引揚げ家族の話」

舞台は面会の為の部屋。あきえが立っている。妹かもしれない女性と会いにきたあきえは、目の前にいる（という設定の）彼女に自分の家族の話をする。

あきえ　父は、日本が負ける少し前に軍隊にとられました。それから一カ月もしないうちにソ連が来て、私と母と妹は新京から汽車で奉天に向かいました。奉天で何日か待たされて、そこから朝鮮に向かう列車に乗り換えました。

舞台はあきえの語りの世界へ。列車の走行音が聞こえてくる。
日本に向かう人々を詰め込んだ無天蓋の列車が、見渡す限りの野を走る。
そこに妹たまえを抱いた母。少女時代のあきえ（以下少女と記す）の姿も。

少女　お母さん。
母　　なに？
少女　おしっこ。

母　我慢しなさい。
少女　でも、
母　もうちょっと。
少女　……。
母　大丈夫。日本はいいとこよ。水が美味しくて、お米がとれて、お魚もとれる。
少女　でも、今はどうなってるかわからないんでしょ？
母　……、
少女　なんで日本行くの？
母　……
少女　満州にいよ。だってお父ちゃんどうなるの？
母　大丈夫。
少女　でも、
母　お父さんとはちゃんと約束してるから、
少女　どんな？
母　日本についたら、舞鶴で待ってますって。
少女　マイヅル？
母　舞う、鶴。お母さんが生まれた町。
少女　どんなとこ？
母　優しいとこ。優しい人がいっぱいいる。

あきえ　列車には天井がありませんでした。強い風が吹きつけました。妹の身体はどんどん熱くなりました。

たまの額は冷や汗でびっしょり。ブルブルと震えはじめる。

少女　お母さん、たまちゃんが、
母　うん。

母はたまに自分の服をかけてやる。あきえは水筒からたまに水を飲ませる。

あきえ　その時、何の予告もなく列車が止まりました。

少女　お母さん、おしっこ。
母　列車から離れちゃダメよ。
少女　うん。

あきえ　私は列車を降りました。外はトウモロコシ畑が広がっていました。私と同じように何人かが茂みに隠れます。私が少し離れたところで用を足していると、

ガクン、列車が動き出す気配。

あきえ　慌てて線路に戻ると、列車はもう走りはじめた後でした。

列車の遠ざかる音。不安に満ちた少女の声が響く。

少女　お母さん！　お母さーーん！

あきえ　日が暮れ始め、トウモロコシ畑が赤い海のようでした。

母　（小さな声で）あきえー。

少女　お母さん！

少女は母に抱きつく。

少女　（泣きながら）ごめんなさい、

母　大丈夫よ、大丈夫。

少女　でも、

母　線路を歩けばいいのよ。次の汽車が来たらそれに乗ればいいし。

少女　……うん。

母　でも、今日は、この辺りで野宿しようか。たまちゃんも疲れてるし。

あきえ　うん。

少女は周囲を見渡す、なにか見つけたようだ。

あきえ　線路からトウモロコシ畑を見渡すと、遠くに納屋らしき小屋をみつけました。

少女　お母さん！

母　（小さい声で喋るようううながす）シーッ、

少女　なんで？

母　（小さな声で）もう夜、ご近所に迷惑でしょ、

少女　誰もいないよ、

母　いいから、小さい声、ね、

少女　うん。あそこ（と、遠くに見える小屋を指さす）、
母　　うん。じゃ、あそこで休も、
あきえ　私たちは歩きました。小屋につく頃には辺りはすっかり暗くなり、冷たい風が吹き始めました。
母は注意深く辺りを見渡し、小屋の戸をあける。
なかは薄暗く、家畜の匂いがする。
少女　（暗がりを指さし、小声で）お母さん、ほら！
そこには牛が寝そべっていた。
牛は三人を見たが、何の反応もしない。
少女　今日、ここに泊まるの？
母　　（静かにしろの意味）シーッ！
誰かが近づく音。母はとっさに牛の背後に隠れる。少女もそのそばに。
カンテラを持った男がやって来て、小屋のなかを見回す。
しばらくして男は小屋を出てゆく。
三人は牛の背後から戻る。
少女　臭い。うんこだらけ、
母はたまを藁がしかれた牛の寝床に下ろし、たまを見つめる。
幼いたまの息は細い。
少女　なぁ、わたしここでいい。ここに泊まろ。
あきえ　母はカバンからハサミを取り出し、髪の毛を切りはじめました。
少女　お母さん？？
母　　静かにしなさい！
あきえ　髪を切り終えた母は、牛のふんをつかみ、顔じゅうに塗りはじめました。

そして怯えるあきえの首をつかみ、無理矢理あきえの髪を切る。
そしてあきえの顔にも牛のふんを塗ろうとするが、

少女　自分でする。

少女は顔にフンを塗る。母はカバンからありったけの食べ物を出す。

少女　何するの？

母は少女のカバンも逆さにふる。なかからカメラが転がり落ちる。

母　　あんた、これ、
あきえ　だって、それお父さんの、

母はカメラを鞄に詰め直し、食べ物だけを集める。

少女　何するの？
母　　いいから、食べ物全部出しなさい。
少女　どうするの？

母は食べ物を、たまのそばに置く。
たまの背後にいた牛が母を見つめる。

少女　嫌！　お母さんやめて！

母がたまを小屋に置いて行こうとしていることに気づいたあきえは、たまを抱きかかえようとする。しかし母はそれを許さない。
それでも妹に抱きつくあきえ、母は強い力であきえを引きはがす。
倒れたあきえを、母が平手打ち。そしてたまに背を向けて、あきえにつぶやく。

母　　行くよ。

あきえ　こうして私と母は、妹を、……。

舞台はゆっくりあきえの語りの世界から、面会室に変わってゆく。

あきえ　母は父と約束していました。日本についたら母の実家がある舞鶴で会おうって。約束通り私と母は舞鶴にいました。舞鶴は港町です。満州や樺太から沢山の人が引き揚げてきました。その人たちからの話を聞き、どうやら父は生きていて、シベリアに抑留されたことがわかりました。それから毎日、母は、港に行って、船が出入りする桟橋を見つめていました。だんだんシベリアから帰国する人が増え、私には父の足音が聞こえ始めたように感じました。でも、母は自分から死を選びました。日本で暮らし始めて三年目のことです。

面会室には妹かもしれない女性と通訳がいる（女性は無対象）。
女性が発言する。

通訳　（女性の発言を訳し）写真を見て良いですか？

あきえ　どうぞ。

女性はあきえが持ってきた写真を眺める。

あきえ　ウチは散髪屋でした。お店の写真もあります。新京の吉野町、そこから商店街に入ったところに店はありました。それ、それがお店の写真です。

あきえの言葉を通訳が女性に伝える。（☆女性の耳元でごにょごにょ言う感じ。明瞭に発話されなくて良い）

あきえ　どうぞ、手に取ってください。

女性は通訳に言われ、写真を手に取る。

あきえ　父、母、わたし、お人形抱いてるのが、妹のたまえです。

女性は次々に写真を手に取る。

あきえ　それは神社のお祭りです。私と妹のたまえです。後ろにいるのが母です。それはホテルです。駅前にあった大きなホテル。父はとっても評判よかったんです。たまにご贔屓さんのところに出張してました。これはその時の。たまちゃんがどうしても一緒に行きたいって、仕事終わるまで、私はたまちゃんと一緒に、駅前の公園で遊んでました。これは吉野町のお寿司屋さん。ここの娘さんが私と同級生でした。たまに卵焼きをくれるんです。卵焼き、わかりますか？　砂糖とお出汁の。たまちゃ

ん甘い卵焼きが大好きだったよね？　それはクリスマスパーティ。パン屋さんの。お父さんがロシア人でお母さんが日本人、その子の家で。憶えてない？　これがパン屋のおじさん。これが私、これがたまちゃん。この枕みたいのがケーキ。果物が乗ってるでしょ。下がビスケットになってて、ビスケットにハチミツが染みてすごく美味しかった。憶えてる？　たまちゃん！　……。

女性は写真をテーブルに置く。そして疲れた様子で目をさわる。
その仕草を食入るように見つめるあきえ。

二幕三場　昭和六一年七月

浮島映画館のロビー。夕刻から夜になる頃。ロビーには誰もいない。
本日は休館日。「ナインハーフ」のポスターがはられている。
上手から信介が現れる。

信介　（何かを探している）えーーー、どこやったかいな、

と言いながら階段を上ろうとした時、降りて来たあきえにぶつかる。
あきえは喪服を着ている。そして肩からあのカメラを下げている。
この日、みちよ、すみの父の葬儀があった。

信介　あ、どうも、
あきえ　いえ。
信介　大丈夫ですか？
あきえ　はい。
信介　すんません。
あきえ　いえ、こちらこそ。
信介　あれ、お義姉さん、屋上行かんの？

二人は見つめ合い、やがて笑い出す。

あきえ　やっぱりダメ。お義姉さんは無理。
信介　だって実際そうやし。
あきえ　私とすみちゃんは従妹です。
信介　あ、

あきえ　忘れてた？
信介　いや、そうか。じゃ、「あきちゃん」？

二人は笑う。あきえはロビーを見渡す。

信介　あ、ベンチが代わった。それから電話。壁とかはそのまんまかな。
あきえ　「明日は明日の風が吹く」、か。
信介　え？
あきえ　でも、すみちゃんと一緒になるとは。
信介　うん。
あきえ　ごめんなさい。
信介　……うん。
あきえ　ここにまた来れるとも思ってなかった。
信介　うん。
あきえ　それと、こんな風に、また喋れるとも思ってなかった。
信介　うん。

あきえはカメラをかまえる。
ロビーの様子を撮ろうとするが、シャッターが下りない。

信介　あれ？
あきえ　さっき、壊れてしまったの。
信介　あ、そうなんや。
あきえ　でも、もうお互いオジサンオバサンやね。
信介　みちよさんなんか、もうおばぁちゃんや。
あきえ　やめてよ、わたし三つ違いなんだから。

階段から喪服姿の俊章が降りてくる。
かつて聖火ランナーとして舞鶴を走った青年も、今は一児の父だ。
みちよにとって孫となる「マァくん」を連れ、葬儀に参列していた。
いまマァくんは映画館の屋上にて「ハレー彗星」を観測しようとしている。

俊章　（信介に）ありました？
信介　あ、あるある。たしかうちのんが小学校の時に、
俊章　ベルマークですか？
信介　へ？

俊章　ウチの子の学校、ベルマークで買うたんですよ、天体望遠鏡。
信介　そんなええもんちゃうし、あんまり期待せんといてな。

信介は再び物置を探しに去る。

あきえ　どう？　見えそう？
俊章　まだ夕方ですしね。
あきえ　七十六年ぶりか。
俊章　あきえさんは屋上行かないんですか？
あきえ　蚊。
俊章　（聞き取れず）え？
あきえ　（やや大きい声で）蚊。
俊章　あぁ。

階段からすみ降りてくる。すみは二の腕を掻いている。

すみ　あら？　あきえちゃんここおったん。
あきえ　うん。
すみ　どう？　カメラ、
あきえ　うん。やっぱり調子悪い。

物置から信介が望遠鏡を持ってくる。

俊章　ありがとうございます。
信介　うん。
すみ　蚊取り線香。
信介　え？
すみ　蚊取り線香どこやったかな、
信介　（すみに）ちょっとまちーな。俊章くん。
俊章　はい。

信介は俊章に望遠鏡を渡す。俊章はそのまま階段を上ってゆく。

信介　たしか去年のが、
すみ　マッチもやで。
信介　わかっとる。

信介はまたも物置に去る。

すみ　見ィひんの？
あきえ　だって蚊が、
すみ　七十六年に一度やで。マァくんより私らぁの方が頑張らな。
あきえ　そやな（と、笑う）みちよちゃん、マァくんに「バァバ」言われて、
すみ　嬉しそうな顔してな。
あきえ　三つ違いでしょ、なんか複雑。
すみ　あきえちゃんとこ娘さんいくつ？
あきえ　上が高校。
すみ　あぁ、まだまだやな、
あきえ　すみちゃんとこの方が早いって。
すみ　どうやろ。
あきえ　浩介くんいま大阪にいるんでしょ？
すみ　うん。
あきえ　何してるの？
すみ　何しとんやろ。
あきえ　え？
すみ　（ため息）
あきえ　浩介くん、映画館は継がないの？

物置から蚊取り線香を持って信介登場。

信介　ほい、あったあった。
すみ　マッチは？
信介　ある。
すみ　あんた持って行って。
信介　ええけど、次は七十六年後やで、
すみ　大丈夫や、私らぁ長生きするさかい。

信介は信じられないという顔で、階段を上ってゆく。

すみ　あの人が反対しとるん。
あきえ　え？
すみ　映画館継ぐん。

あきえ　なんで？
すみ　さぁ、ビデオいうん？　これからはアレの時代や言うて、
あきえ　でもビデオなんか、持ってる家少ないし、
すみ　これから流行るんちゃう。
あきえ　でも、やっぱり映画は映画館よ。せっかく浩介くんが継ぎたいっていってくれてんだし。
すみ　それが言うとらんのや。
あきえ　え？
すみ　浩介は継ぎたいともなんとも言うとらんのに、あの人が先回りして「映画館だけは継がさん」言いだして、
あきえ　あらら、
すみ　「お前みたいに根気のない奴に映画は無理や」言うてしもて、大喧嘩。
あきえ　なんでそんなこと言うの？
すみ　さぁ。そんだけ継いで欲しいんとちゃう。

あきえは呆れて黙り込む。階段から俊章に手をひかれみちよ登場。
みちよはまだ五十代だが、最近膝を悪くしている。みちよも喪服。
俊章はみちよを介助して歩く。

すみ　あれ？　ハレー彗星は？
みちよ　ちょっと休憩。
すみ　ほんなサイダーでも飲みますか。
みちよ　ありがとう。

すみは立ち上がり、売店の方へ去る。
みちよはロビーの椅子に座る。

みちよ　ここにおったんかいな。
あきえ　蚊が、
みちよ　やっぱり若いんやね、私なんか見向きもされへん。
あきえ　（笑う）ちょっと、やめてよ。いう事までおばぁちゃんみたい。
みちよ　そぉ？
あきえ　なんか、顔似てる。マァくんとみちよちゃん。
みちよ　それはないわ。
あきえ　ほんと。横顔なんかそっくり。
みちよ　あるわけないやん。

俊章　でも横顔は確かに。
あきえ　ねぇ。

すみがサイダーを三本持って戻ってくる。

すみ　マァくん、炭酸飲める？
俊章　あ、ありがとうございます。できればオレンジジュースで、
すみ　はいはい。

ロビーの低いテーブルに瓶を置いて、すみは再び去る。

あきえ　あの写真、見ましたよ。
俊章　え？
あきえ　聖火ランナーの。
俊章　あぁ、
みちよ　あれ、たしかこのカメラやな、
あきえ　うん。このカメラ。
俊章　あ、そうなんですか？
みちよ　そう。あきえちゃんのお父さんの。

すみはオレンジジュースの瓶を持って登場。

すみ　はいこれ（サイダー三本、オレンジジュース一本）。屋上持ってって、
俊章　あ、ありがとうございます。

すみは俊章に瓶を渡しながら、

すみ　何の話しとったん？
みちよ　この子の聖火ランナー、このカメラ使っとったな言うて、
すみ　そうそう。

すみはまた売店の方に去る。

俊章　どうも、ありがとうございました。
あきえ　え？
俊章　カメラ。

あきえ　いえ。

俊章は瓶を抱えて階段を上ってゆく。入れ違いにすみ戻ってくる。
お盆にサイダーの瓶二本とグラス三つのせている。
三人はサイダーをグラスにつぐ。

すみ　ちょっと似てきたんちゃう。
あきえ　え？
すみ　俊章さんとお姉ちゃん。
あきえ　あ、そうか。そもそもそこが似てるんだ。
すみ　うん。横顔がそっくりやわ。
みちよ　なんで似んのよ。

すみは、三つのグラスにつぎ終わる。

すみ　じゃ、
あきえ　うん、
みちよ　あきえちゃん遠いとこありがとうね、
あきえ　うんうん。オジサンにはお世話なったもん。
みちよ　お父ちゃんに。

三人は父に献杯。

みちよ　山の上、どうなっとるやろ。
あきえ　いま誰も住んでへんの？
みちよ　もうだいぶ前からよ。
すみ　家が、そのまま、残っとるるだけ。
あきえ　へー。
みちよ　お父ちゃんも最期ぐらい見たかったやろな。
あきえ　車に乗せたげたら良かったな。
すみ　道が、もう。小学校がなくなってから、あの道も通れんようなってしもた。
あきえ　そうか。
みちよ　オバサンの骨どうするん？
あきえ　うん。
すみ　何？
みちよ　あきえちゃんのお母さん、ウチの墓におってやろ？

すみ　移すん？
あきえ　うーーん。
みちよ　歩けるうちに色々済ましたほうがええで、
すみ　昔は山の上から、ここまで行ったり来たりしとったのになぁ。
あきえ　わたし？
すみ　そうやん。同じ映画何回も観て、
あきえ　わたしが？
すみ　ちょっと、忘れんといて、
あきえ　忘れるよ、どんどん忘れる。
みちよ　ありがとうな。
すみ　うん？
みちよ　お葬式出れたんも、すみちゃんのおかげや。
すみ　こうして三人そろたんはお父ちゃんのおかげ。
あきえ　オジサン、私ら家族のことすごい気にしてくれてた。新聞で残留孤児の記事が出たらすぐ電話してきてくれた。
すみ　そうやった。

三人はそれぞれソーダを口に運ぶ。しばらく沈黙があり、

みちよ　ほんまに、他人やったんやろか。
あきえ　うん。
みちよ　でも、
あきえ　違ってた。あの人じゃなかった。だって本人がそういうんやもん。
すみ　そうか。
あきえ　あの時は写真とカメラ、送ってくれてありがとうね。
すみ　（否定の意）うんうん、だってあきえちゃんのもんやもん。
みちよ　あの人、写真見て違う言わはったん？
あきえ　（うなずく）。「たまえ」という名前に聞き覚えはないって、それで面会は終わり。
すみ　でも血液型とか調べとらんのやろ？　なんでお願いせんかったん？
あきえ　面会の部屋を出たら、廊下にあの人の家族がいたのよ。旦那さん、子供さん、おじいさんにおばぁさん。みんな不安な顔してた。私のこと怖がってるみたいに見えた。あの人にはあの人の人生があって、家族がいて、今の生活があって。
すみ　でも、
みちよ　もうええやん。
すみ　その人かって、ほんまの家族に会いたいから、名乗り出たんやろ？
みちよ　そやけど、

すみ　大事なんはその人がほんまに妹さんかどうかやん。
みちよ　あきえちゃんかってそれはわかっとるで。
すみ　ほんなら、
みちよ　すみちゃん。私らが口だすことちゃうでしょ。
すみ　……。

信介階段から登場。階段の途中で。

信介　おい、見えた、はよ来い、ハレー彗星や！
あきえ　ごめんなさい。
みちよ・すみ　え？
信介　何しとんや、もう二度と見れへんど、
あきえ　……わたし、できることあったかも。私も一緒。お母さんと一緒。たまちゃん、ごめんね。

そう言ってあきえは泣き崩れる。
みちよとすみはあきえによりそう。

穏やかな波の音が泣き声を包み込んでゆく。

おわり

☆朝日新聞１９８０年1月１１日東京朝刊より
舞鶴弁指導　椿幸恵
協力　公益財団法人　舞鶴市文化事業団

参考資料
「生きて帰ってきた男―ある日本兵の戦争と戦後」小熊英二　岩波新書
「引揚港　舞鶴の記録」　舞鶴市編
「母なる港　舞鶴」　舞鶴引揚記念館
「夕鶴の詩（郷土編）語り継ぐ戦争体験」　岩見隆哉
「昭和二十八年年災害回想録」　舞鶴市多門院地区編